様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６８０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３１５５

研究課題名（和文）現代日本語における述語と補部の相互作用に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Interaction between Predicates and Complements in Modern Japanese

研究代表者
三好　伸芳（Miyoshi, Nobuyoshi）

武蔵野大学・文学部・講師

研究者番号：９０８２４３００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、日本語の名詞句や時に関わる表現（時制）について、述語との相関関係から解明しようと試みたものである。例えば、「大学生に｛話しかけた／憧れている｝」のような例を見ると、述語「話しかける／憧れる」の意味的性質に応じて「大学生」という名詞句が特定的なのか不特定的なのかが異なっていることが分かる。本研究の成果により、このような述語の意味的性質は、名詞を修飾する構造や埋め込み文の時制的な解釈とも密接な関係があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語の名詞句の研究については、これまでコピュラ文（「AはBだ」のような文）や存在文（「Aがいる」のような文）といった特定の環境を問題にした分析がなされてきた。本研究は、先行研究の分析を発展させ、さまざまな語彙的意味を持つ述語を対象として名詞句の解釈との相関関係を体系化した点に意義がある。その結果、これまでに指摘のなかった、述語と埋め込み構造やその時制解釈に新たな分析の観点をもたらした点においても、学術的な貢献が認められると考える。

研究成果の概要（英文）：This research aims to elucidate the interaction between predicates, noun phrases, and temporal interpretations in Japanese. The specificity of Japanese noun phrases is determined by the lexical meanings of predicates. For example, the arguments of the predicate "akogareru" ("admire") are interpreted as nonspecific noun phrases, while the arguments of the predicate "hanashikakeru" ("talk") are interpreted as specific noun phrases. The most significant achievement of this study is that the semantic features of Japanese predicates are closely related to the tense interpretation of relative clause structures and embedded clauses.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語　意味論　名詞句　指示性　内包性　述語の語彙的意味　連体修飾　テンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現代日本語文法に関する本格的な研究は、三上（1953）に始まる。その後形成された以下に挙げる 2 つの潮流は、現代日本語の文法研究を牽引してきたと言ってよい。

（1）　a.　動詞を中心とする述語類とその文法範疇に関する研究
　　b.　従属節の文法的性質に関する研究

（1a）については、アスペクト・テンス・ムード（モダリティ）といった文法範疇と述語および構文の意味に関する膨大な記述的・理論的な蓄積がある（久野 1973、井上 1976ab、益岡 1987、高橋 1994 など）。また、（1b）については、従属節形式ごとの統語的な性質が体系的に明らかにされているほか、連体修飾節の類型についてもまとまった分析が展開されている（南 1974、奥津 1974、寺村 1975-1978、田窪 1987 など）。

一方で、述語および従属節研究の外側に位置づけられる分野や、これらの領域をまたがった分野については、これまで正面から取り上げられることがなかった。しかしながら、そのような研究領域においても、次のような極めて重大な課題が残されている。

（2）　a.　述語の語彙的・文法的性質は、名詞句の解釈にどのような影響を与えるのか
　　b.　主節述語と従属節の間には、どのような意味的相互作用が存在するのか

これらの問題を解決することは、今後の日本語研究を進展させるうえでも極めて重要な課題となっている。

２．研究の目的

ここまでの問題提起を見据えた際に重要なことは、いずれの課題においても、述語とその補部との関係性の究明が解決の鍵になっているという点である。以上を踏まえ、本研究は次の 2 点を目的として設定する。

（3）　a.　名詞句と述語との意味的相関の体系化
　　b.　従属節と主節述語との相互作用の解明

（3a）は、日本語における名詞句の特徴を、述語との関係性から明らかにするための基礎的な作業となる課題である。形態的特徴に乏しい日本語の名詞句の文中における解釈は、述語の語彙的性質や文法範疇によって決定されると予測される。事実、名詞句が述語から受ける影響には、少なくとも以下のような語彙的性質と文法範疇に由来するものとがある。

〈語彙による対立〉

（4）　a.　心の優しい医者を紹介した。　（　ある心の優しい医者を紹介した。）
　　b.　心の優しい医者を想像した。　（　誰であれ心の優しい医者を想像した。）

〈文法範疇による対立〉

（5）　a.　心の優しい医者が私を診察した。　（　ある心の優しい医者が診察した。）
　　b.　心の優しい医者がいつも私を診察する。　（　誰であれ心の優しい医者が診察する。）
　　c.　心の優しい医者が私を診察するだろう。　（　誰であれ心の優しい医者が診察する。）

（4）において、「心の優しい医者」を不特定的に解釈可能なのは（4b）のみであり、「紹介する」と「想像する」の間に語彙的な対立がある。また、（5）において不特定的な解釈が可能なのは（5bc）のみであり、アスペクト・テンス・ムードといった文法範疇において対立が見られる。日本語研究においては、動詞を中心とする述語類に関して豊かな記述的蓄積がある一方で、述語

の語彙的性質や文法範疇に応じて名詞句がどのような解釈を受けるのかという問題については未解明であり、上述のような対応関係について体系化していく必要がある。

（3b）は、従属節の文法的性質について、主節述語との相互作用を通じて捉えることで、従来とは異なった観点から光を当てるための課題である。以下の例文は従属節と主節述語の相互作用を観察するうえで興味深い特徴を備えており、注目に値する。

（6） a. 太郎が今も独身だったことにあきれた。
b. 太郎が今も独身だったことをうらやんでいる。
（7） a. ?? 太郎が今も独身だったことを疑った。
b. ?? 太郎が今も独身だったことを信じている。

（6）は、従属節内部に現在時を表す副詞と「タ」（いわゆるムードの「タ」）が現れている。このような解釈が容認されるのは「あきれる／うらやむ」等の述語においてのみであり、（7）のように「疑う／信じる」等においては容認されない。すなわち、主節述語の意味的性質が従属節内部のテンス解釈に何らかの影響を及ぼしていることを示している。

３．研究の方法

主節述語との関係性を通して名詞句や従属節の文法的性質を明らかにしようとするとき、必然的に議論の対象となるのが、連体修飾構造の問題である。連体修飾構造は、被修飾名詞句を介して従属節と主節を結びつける構造であり、名詞句および従属節の研究を横断する研究領域にほかならない。従って、本研究では、連体修飾構造の観察を通じて、名詞句および従属節と主節述語との文法的関係性を明らかにしていく。

（8） a. 心の優しい太郎を想像した。 →制限的修飾を受ける定指示名詞句
b. 2 時間も遅刻する太郎にあきれた。 →相対時制でも絶対時制でもないル形

（8a）に示したように、項となった名詞句に不特定的な解釈をもたらす「想像する」という述語は、一般に意味的な限定を受けないとされる定指示名詞句を制限的に修飾する環境に生起することができる。また（8b）のように、従属節にムードの「タ」の解釈をもたらした「あきれる」という述語は、連体修飾構造において相対時制でも絶対時制でもないル形と容易に共起することができる。これは、補部に現れた連体修飾要素に特殊な解釈をもたらす主節述語が、文法的にも重要な性質を備えていることを示している。このような観察に基づき、本研究は、連体修飾構造に特異な解釈をもたらす述語群を分析することによって、前述した現象への説明を試みる。

４．研究成果

本研究の成果は、主に以下の 3 点にまとめられる。

（9） a. 述語との相関に基づく名詞句の解釈メカニズムの解明
b. 主節述語との相互関係から見た連体修飾構造の分析方法の提示
c. 時制解釈と主節述語の相関関係の発見

以下、それぞれの成果について説明していく。

① 述語の意味と名詞句の解釈

本研究の成果の 1 点目として、述語との相関に基づいて日本語名詞句の解釈メカニズムを解明したという点が挙げられる。本研究においては、項となった名詞句にどのような解釈をもたらすかという点から、〈外延的述語〉（extensional predicate）および〈内包的述語〉（intensional predicate）

という概念を規定する。外延的述語には、主として動作動詞述語や客観的なカテゴリーを示す名詞述語等が該当する。一方で、内容的述語には、項が心的世界のものであることを表す動詞述語、形容詞述語、評価的な意味を表す名詞述語が該当する。

（10）a. 〈外延的述語〉…現実世界における実現が確定した事態において、項となった名詞句に対し、外延的文脈のみを構成する述語。
b. 例：歩く、訪ねる、会う、話す、壊す、殴る、捕まえる、学者だ、警察官だ

（11）a. 〈内包的述語〉…現実世界における実現が確定した事態において、項となった名詞句に対し、内包的文脈を構成しうる述語。
b. 例：思い浮かべる、憧れる、格好いい、おとなしい、優しい、好きだ、立派だ

「外延的述語／内包的述語」は、語彙意味的に異なる性質を持つだけでなく、項となった名詞句にも意味的に異なった解釈をもたらす。例えば、外延的述語の項となった名詞句は、ある世界における対象を問題にしなければならないため原則として指示的名詞句となる。一方で、内包的述語の項となった名詞句は、必ずしも現実世界における存在が含意されないため非指示的名詞句として解釈することが可能である。このことは、それぞれの述語の項に現れた名詞句に「というもの」を付加できるかという点から確かめることができる。

（12）a. 私は東京で生まれた女性（??というもの）に会った。
b. 私は東京で生まれた女性（というもの）に憧れている。

（12a）のように、「会う」などの外延的述語の項となった名詞句に「～というもの」を付加した場合、容認度が著しく下がる。一方、（12b）のように、「憧れる」のような述語の項となった名詞句に「～というもの」を付加した場合にはほとんど意味を変えることなく解釈が可能である。（12b）に対し、（12a）のみ容認性が下がるのは、「～というもの」という要素が「～という属性を有するもの」という内包的な解釈を含意しており、外延的文脈とは馴染まないからであると考えられる。

従来の日本語研究においては、名詞句の解釈は主として名詞の語彙的性質やコピュラ文、存在文といった特定の環境下における振る舞いから分析されてきた。本研究の成果は、広範な述語を対象として述語と名詞句の依存関係を体系化した点で重要である。

② 連体修飾構造と主節述語の相関

成果の 2 点目として、主節述語との相関関係から連体修飾構造を分析することが可能になったという点が挙げられる。「外延的述語／内包的述語」という区別は、連体修飾要素の機能を区別する上でも重要である。具体的には、外延的述語の項に現れた連体修飾要素は原則として非制限的（nonrestrictive）になるのに対し、内包的述語の項に現れた連体修飾要素は制限的（restrictive）に解釈することが可能である。

（13）〈制限的修飾〉
a. <u>沢山の雪が積もった</u>田舎町はとても魅力的だ。
b. <u>沢山の雪が積もった</u>白川郷はとても魅力的だ。

（14）〈非制限的修飾〉
a. <u>沢山の雪が積もった</u>田舎町を訪れた。
b. <u>沢山の雪が積もった</u>白川郷に宿泊した。

内包的述語が主節に現れている（13）の連体修飾要素は、「田舎町／白川郷」のような被修飾名詞句を意味的に限定していると考えられるのに対し、外延的述語が用いられている（14）では「他の田舎町ではなく、沢山の雪が積もった田舎町／夏の白川郷ではなく、沢山の雪が積もった白川郷」のような意味合いが感じられず、非制限的な解釈となっている。（13）の例から明らか

なように、内包的述語が主節に現れているには「白川郷」のような固有名詞も意味的に限定することが可能になる。

これまでの連体修飾研究においては、連体修飾要素の解釈が主として被修飾名詞（句）の指示性によって決定されるとされてきた。しかし、実際には主節述語の意味的性質が連体修飾要素の解釈とも密接な関わりを持っている。本研究が提案した「外延的述語／内包的述語」という区別により、「主節との相関から見た連体修飾構造」という新たな視点が得られたと言える。

③　連体修飾構造と主節述語の相関

成果の 3 点目として、時制などの文法的解釈と主節述語の間にも密接な関係があることを示した点が挙げられる。本研究においては、内包的述語に「名詞句の記述内容を、特定の可能世界と特定の時間領域のいずれかにおける属性として解釈するもの（＝タイプⅠ）」と「名詞句の記述内容を、義務的に特定の可能世界における属性として解釈するもの（＝タイプⅡ）」という区別を立てる。

（15）〈タイプⅠ〉

a. ＊私は先日の大会に出場する太郎に憧れている。

b. ＊彼は去年の卒業式で答辞を述べる彼女をうらやんでいる。

（16）〈タイプⅡ〉

a.　私は先日の大会に出場する太郎を思い浮かべている。

b.　彼は去年の卒業式で答辞を述べる彼女を想像している。

通常であれば、過去の事態を表す述語は基本形となるため、（15）のように「先日の大会に出場する／去年の卒業式で答辞を述べる」のような表現は、従属節であっても許されない。一方で、本研究がタイプⅡに分類する内包的述語においては、そのようなテンス形式が許容されるという特徴が見られる。これは、「思い浮かべる／想像する」などの述語の項に現れた要素が現実世界における事態ではなく、主語名詞句の信念世界における事態の描写として解釈されるからであると考えられる。

従来のテンス研究においては、従属節事態と主節事態のテンス形式および時制解釈の対応関係が問題にされてきた一方で、主節述語の語彙的意味によって時制解釈が変わりうるという事実は指摘されてこなかった。本研究の成果により、従属節時制の解釈にも主節述語との相関から分析すべき言語環境が存在することが明らかにされた。

【引用文献】

井上和子（1976ab）『変形文法と日本語 上・下』大修館書店.
高橋太郎（1994）『動詞の研究―動詞の動詞らしさの発展と消失―』むぎ書房.
奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論―名詞句の構造―』大修館書店.
久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店.
田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5，pp. 37-48.
寺村秀夫（1975-1978）「連体修飾のシンタクスと意味」『日本語・日本文化』第 4～7 号，大阪外国語大学（寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』くろしお出版 pp. 157-320 所収）.
益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版.
三上章（1953）『現代語法序説―シンタクスの試み―』刀江書院（1972 年，くろしお出版）.
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Nobuyoshi MIYOSHI	４．巻 21
２．論文標題 Nonrestrictive Adnominal Clauses and Text Genre in Japanese	５．発行年 2021年
３．雑誌名 NINJAL Research Papers	６．最初と最後の頁 163-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003442	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三好 伸芳	４．巻 100
２．論文標題 形容詞述語と直喩表現	５．発行年 2021年
３．雑誌名 實踐國文學 = Journal of Jissen Japanese Language and Literature	６．最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三好伸芳	４．巻 2
２．論文標題 統語情報付きコーパスによる名詞句と述語の共起関係の分析	５．発行年 2020年
３．雑誌名 KLS Selected Papers	６．最初と最後の頁 215-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三好伸芳	４．巻 98
２．論文標題 名詞句における内包性と指示性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 実践国文学	６．最初と最後の頁 17-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002199	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三好伸芳	4．巻 97
2．論文標題 "まとめ"を表す接続表現と後文脈の制約	5．発行年 2020年
3．雑誌名 實踐國文學	6．最初と最後の頁 101-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三好伸芳	4．巻 20-1
2．論文標題 連体修飾要素の解釈と述語のタイプ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本語文法	6．最初と最後の頁 20-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 三好伸芳・窪田悠介
2．発表標題 直喩表現と前提性
3．学会等名 日本言語学会第164回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 三好伸芳
2．発表標題 措定文の述語に現れる固有名詞の意味的性質
3．学会等名 日本語文法学会第22回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 三好伸芳
２．発表標題 相対補充節から見た「内の関係／外の関係」の分類
３．学会等名 日本語学会2020年度秋季大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 三好伸芳
２．発表標題 コピュラ文と存在文に現れる非指示的名詞句の意味的性質
３．学会等名 日本語文法学会第21回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 三好伸芳
２．発表標題 名詞句と述語の共起関係から見たコーパス研究
３．学会等名 関西言語学会第44回大会シンポジウム「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」
４．発表年 2019年

１．発表者名 三好伸芳
２．発表標題 統語解析情報付きコーパスを用いたテキストジャンル間の比較
３．学会等名 日本語学会2019年度秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三好伸芳
２．発表標題 ガ節における従属節事態先行型のル形
３．学会等名 日本語文法学会第20回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 三好　伸芳	４．発行年 2021年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 284
３．書名 述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体修飾構造	

１．著者名 竹沢幸一・本間伸輔・田川拓海・石田尊・松岡幹就・島田雅晴	４．発行年 2019年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 290
３．書名 日本語統語論研究の広がり ： 記述と理論の往還	

〔産業財産権〕

〔その他〕

実践女子大学 研究者情報データベース http://gyoseki.jissen.ac.jp/profile/ja.b5cc32b3f0593120.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関